

特集号によせて

今日ほど日常の診療における臨床検査の重要性を認識されている時はないであろう。検査室では毎年増加する検査件数に対して、検査の簡易化、自動化、更に新しいデータ処理法の導入などにより、医師側の要求にできるだけこたえようと懸命の努力を続けているが、人員や設備の点で思うに任せないのが現状である。

しかしいかに多数の検体処理に追いまくられても、正確さ、迅速さは臨床検査にとって絶対に堅持しなければならない鉄則である。検査の基本技術をしっかりと身につけ、理論的に正しい測定法を習得した者のみがこれを守ることができる。

技術者は昔から先輩を見習いながら、また先輩の手ほどきを受けながら、いわゆる man to man の教育・指導によって技術を受け継ぎ、自らのものとして身につけてきた。こうして文字では書き表せない、いわゆるコツというものがある。実際試験管 1 本の取り扱いにも、また比色計の取り扱いにも、それぞれコツがある。

本誌は発刊以来“マスターしよう基本操作”として、技師として身につけなければならない基本技術の解説をグラフで行ってきている。これらは単なる手技の解説とは異なり、正に実地に先輩が手を取って教えてくれるそのままを紙面に移し得たものと自負している。

今回、本誌発行 3 年目を迎えるに当たって、日常検査を主体とした技術のグラフによる解説を企画した。内容的には本誌の“マスターしよう基本操作”に比べてより実地的なものとして、検査室で日常行われているいくつかの主要な検査項目を取り上げた。これらは“マスターしよう基本操作”と一連のものとして、学生諸君の実習用に利用されてもよいし、あるいはまた既に検査に従事している若い卒業者の方々が、特集号のみを単独に利用されてもよいように、その内容を選択したつもりである。

その一例をあげれば、生化学検査における自動分析装置の取り扱いであり、血液検査における自動血球計数装置の取り扱いである。これらの自動測定機器の検査室への導入により、従来の検査の基本技術は無用になったと考える人もあろう。しかし臨床検査技師は単なる測定機器の操作者あるいは番人であってはならない。測定の原理、機構を十分に理解し、正しい操作によって初めて正確な測定値を得ることができる。更に大切なことは、自動測定機器の示す値が正しいかどうかをチェックし、また従来の方法による測定値と比較検討するためにも、臨床検査の正しい基本的知識と技術を修得していなければならないということである。

種々の事情により紙面に制約があり、数多い日常検査手技のすべてを網羅することは不可能であった。しかし執筆者はそれぞれ限られたページ数の中で、少しでも役に立つ内容をとかなり苦心をされている。

本特集の意図を十分にくみとして、学生実習あるいは日常検査の場で活用されることを望みたい。

(山中 學 東大教授、中検部長)